

氏 名：山路 野百合

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲第 223 号

学位授与年月日：2022 年 3 月 10 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論文審査委員：主査 大久保 暢子（聖路加国際大学准教授）

副査 小林 京子（聖路加国際大学教授）

副査 大田 えりか（聖路加国際大学教授）

副査 上別府 圭子（一般社団法人子どもと家族の QOL 研究センター
代表理事）

論 文 題 目： Creation and Evaluation of the Picture Book as a Communication
Tool for Children with Cancer: A Mixed Methods Study

博士論文審査結果

小児がん領域の医療従事者は、がんの子どもに病気を伝える必要性を認識しつつも、がんについて子どもと話す機会は少なく、それを促すコミュニケーションツールも少ない。特に子どもの成長発達や感情を考慮し、それに対応しながらがんについて話し合うことは重要な点であるが、それを含めたコミュニケーションツールはない。本研究は、がんの子どもと家族、医療従事者が、子どものがんについて話すことが出来る絵本をコミュニケーションツールとして作成し、実用可能性を評価した。

研究方法是、質問紙とインタビュー調査を用いた収束的デザインの混合研究法であった。対象者は 4 歳以上の健康な子供 21 名とその家族、4 歳以上のがんの子ども 3 名とその家族、小児がんの看護経験を持つ医療従事者 14 名であった。分析方法は量的・質的データをジョイントディスプレイによるメタ統合を行った。結果、85%以上の医療従事者と家族は、絵本が子どものがんについて話すコミュニケーションツールとして利用可能であること、小児がんを理解するための教材として有用であると回答した。がんと健康な子どもからは、絵本に興味を示す反応が認められた。一方、絵本の文章と絵の不一致、不適切な表現が含まれており、がんの子どもと家族が不安を示す点を認め、修正を繰り返すことで不安は緩和を認めた。

以上、作成した絵本は、がんの子どもたちと家族、医療従事者が、がんについて話した

めのコミュニケーションツールとして有用であり、実用可能であると判断できた。

審査では、修正点として、コミュニケーションの定義を明確にすること、研究対象者であるがんの子どもと健康な子どもの結果を分けて記載し考察すること、予備研究に関する多量な文章を整理すること、研究の限界として、絵本を読んだ時の子どもの感情に関する分析の限界、絵本の内容として子どもの感情の受け止め方の記述の限界を示すことが指摘された。

上記についての修正が確認され、作成した絵本は、がんの子どもとその家族、医療従事者が、がんについて話す機会を促すツールとして非常に有用であると評価できた。加えて本研究プロセスにおいて、がんの子どもへのインタビューなどを積極的に遂行し、主体的な取り組みも高く評価できた。

以上、本論文は、本学学位規程第5条に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。